

広島大学大学院 総合科学研究科  
 溝田悟士 xqjhf345@gmail.com  
 25 Mar 2010

## 共観福音書における「空の墓物語」の編集史的研究

### I. 研究目的

本研究では、共観福音書の中で最初に書かれたのがマルコ福音書であるという「マルコ優先説」を議論の「前提」として、マタイ、ルカ両福音書の著者たちが、マルコ福音書の「空の墓物語」(16:1-8)を改変している箇所を指摘し、その全体像を描き出すことを試みるものである。この研究は、キリスト教の黎明期における教義の核心部分の解明に貢献するものである。

従来までの研究では、マタイ、ルカ両福音書の著者たちによるマルコ福音書の「空の墓物語」の改変の原因を包括的に解明できていない。従って、今回は特に「空の墓物語」の登場人物の相違、中でもイエスの復活を告知する人物が福音書ごとに相違している件について重点的に着目することで、この改変の原因について包括的に説明できる新しい仮説を提出することを目的とする。

まず、「空の墓物語」の中でイエスの復活を告知する人物は、最初に成立したマルコ福音書では「白い長い衣を着た若者」(マルコ 16:5)であるのに対し、マタイ福音書では「主の天使」(マタイ 28:2)、ルカ福音書では「輝く衣を着た二人の人」(ルカ 24:4)となっているが、これらの違いを「マルコ優先説」を前提にして、マルコ福音書の記述をマタイ、ルカ両福音書の著者たちが改変したことによって生じた違いであると考えられる。

### II. マルコ福音書の「逃亡する若者」と「空の墓の若者」とのテキスト統辞関係

#### 1. 分析のためのモデル化

まず、この問題を解くために、マルコ福音書におけるイエスの復活を告知する登場人物である若者(16:5)と、マルコ福音書の「特殊記事」であるイエスの逮捕時に「逃亡した若者」(14:51-52)を同一人物とする解釈の可能性を検討したい。

マルコ福音書は、読者がこの二人の「若者」を同一視するように導く「テキスト統辞」を、内在している。<sup>1</sup> マルコ福音書において、イエスが逮捕された箇所から福音書の結末部分までを簡条書きに抄録し、物語の流れの概略を確認しておこう。

イエスが人々に捕らえられる。(14:43-49)

弟子たちが皆、イエスを見捨てて逃げる。(14:50)

\* ある若者 νεανίσκος が、着て περιβάλλω いる 亜麻布 σινδών を捨てて逃げる。(14:51-52)

イエスが十字架につけられる。(15:6-15)

イエスが息を引き取る。(15:33-51)

イエスが 亜麻布 σινδών で巻かれ、墓に納められる。(15:42-47)

安息日が終わり、婦人たちが墓に行く。(16:1-2)

<sup>1</sup> 「テキスト統辞」とは、『記号』の配列を規定する統辞規定のほかに、それによって生み出された『統辞的単位』の配列を規定する一段と高次のレベルでの統辞規定のことである(池上嘉彦『記号論への招待』岩波新書、1984年、160-61頁)。

- \* 若者 νεανίσκος が墓の中で白い長い衣を着て περιβάλλω 右側に座っている。(16:5)  
 その若者がイエスの復活を宣言する。(16:6)  
 婦人たちが墓を出て逃げ去る。(16:8)

重要なことは、「逃亡する若者」(14:51-52)の箇所に含まれる「若者 νεανίσκος」「亜麻布 σινδών」「着る περιβάλλω」という3つの語彙が、他にはマルコ福音書では上述した箇所にしか出てこないことである。つまり、14:51-52 がそのテキストに含まれる語彙を元にして、他の部分とテキスト統辞を形成している可能性を指摘できる。この3つの語彙にのみ着目すると、物語の進行は次のような四つのテキストにモデル化できる。

- a. (&) 若者が亜麻布を着ている。(14:51)
- b. (&) 若者が亜麻布を捨てて、逃げる。(14:52)
- c. (&) イエスの遺体が亜麻布で包まれる。(15:42-47)
- d. (&) 若者が白い長い衣を着ている。(16:5)

まず「a」と「b」は、文字通りの意味にとることもできるが、その後の「c」から「文脈的比喩」<sup>2</sup> ととることも可能である。「a」と「b」のどちらのテキストもともに選択制限の違反<sup>3</sup> はなく、これのみでは文脈比喩の可否を決定し兼ねる。しかし、「c」に至って「亜麻布」の用途が理解されることになり、文脈的比喩が成立していることが明瞭になる。

この「亜麻布」は、15:46 で使われている死者が身にまとう「死に装束」と同じ用途を想定するのが妥当ということであろう。<sup>4</sup> 従って、「亜麻布」に「死に装束」を代入して、次のように理解される。

- a. 若者 νεανίσκος が 死に装束(x) を 着ている περιβάλλω。
- b. 若者 νεανίσκος が 死に装束(x) を 捨てて、逃げる。
- c. イエスの遺体 が 死に装束(x) で 包まれる。
- d. (&) 若者 νεανίσκος が 白い長い衣(y) を 着ている περιβάλλω。

この時点で、「a」の「若者 νεανίσκος」という主語と「着る περιβάλλω」という動詞が、問題の「d」と同じであることから、その意味は現時点では不分明ながら、主語と動詞によって文脈比喩を構成する「テキスト統辞」の射程が「d」にまで及ぶ可能性を指摘できる。つまり、「a」と「d」の両方の「若者」

<sup>2</sup> 山梨正明『コレクション認知科学5；比喩と理解』東京大学出版会、2007年、39-47頁。

<sup>3</sup> 「i.e. “食べる”という動詞は、“夢”のような抽象物を指す目的語とは通常は共起しない」(山梨18頁)。

<sup>4</sup> Michel Gourgues, “A Propos du Symbolisme Christologique et Baptismal de Marc 16.5,” *New Testament Studies* 27(1981): 673 は、「死に装束 linceul」である可能性について若干の言及をしている。その他言及をしている文献は John Knox, “A Note on Mark 14:51-52,” *The Joy of Study* (New York: MacMillan, 1951) 29 など。ちなみに、Albert Vanhoye, “La Fuite du Jeune Homme Nu (Mc 14, 51-52),” *Biblica* 52(1971): 404 はマタイにもルカにもこの亜麻布をあらわすギリシャ語は一度だけしか使われていないのに、マルコでは逃亡する若者の箇所(14:51-52)とイエスの埋葬の箇所(15:46)で二度ずつ、合計四回使用されていることの意義を強調している。

が同一人物であり、その衣服が違うのは彼が「着替えた」ためである、と理解できるのである。

## 2. 同一視に対する反対論の検討

なお、この「若者」が「着替えた」と考えるのは、両方の「若者」の同一視を単に「前提」としたのではなく、「推考散策」<sup>5</sup>の途上における選択肢のうちの一つである。

当然のことながら、別の選択肢を主張し、両方の「若者」を同一視することを否定する反論がある。なかでも特に注目すべきであるのは、Adela Yarbro Collins による冠詞の有無に関する反対である。Collins は、もしマルコの著者が 16:5 の若者を 14:51-52 の若者と同一人物だと意図したのであれば、マルコの著者は 16:5 では \* ὁ νεανίσκος のように定冠詞を使っただろうと、同一視を疑問視する。<sup>6</sup>

この Collins による反論は、二人の「若者」が同一人物であることを直接否定しようとすることを目的として、16:5 の νεανίσκος 周辺の「語彙」を問題にした点では評価できる。しかし、「限定詞」としての定冠詞の有無は、反証としては全く役に立たない。同一文書の二箇所が存在する同一の語の後者に「限定詞」が付けば前者との同一性を担保するということが可能だが、逆の定冠詞がないことを以って同一性を否定する理由とすることは不可能である。さらに、14:51-52 の「若者」とは別人であることを示す直接的な反証となるギリシャ語の語彙 ἕτερος (ルカ 20:11 参照) や ἄλλος (黙 7:2 参照) などが、この 16:5 の νεανίσκος の周辺には存在していない。このように同一人物であることを直接否定できる修飾語句のレベルでの反証の存在を主張できないなら、文書中に二箇所しか存在しないことを以って同一人物であると理解すべきである。<sup>7</sup> 特に、著者が読者に隠された内容を「発見」させる「柔軟で創造的な認知プロセス」として著者が比喻構造を設定したと疑われる場合もあり、<sup>8</sup> むしろ文学技法としてあえて定冠詞の使用を避けていると考えるほうが自然であろう。この点で反論をするということは「推考散策」における他の選択肢を主張するということであるが、その場合にこれらの「若者」の同一視に反対できるだけの合理的な選択肢が存在するとは思えない。

## 3. 「空の墓」の「若者」の身元について

この時点で、「マルコ優先説」を「前提」としたことを再確認しておくことは重要である。つまり「マルコ優先説」を認める以上は、他の福音書の記述から「空の墓物語」の若者を「天使」と結論したう

<sup>5</sup> 「推考散策」とは、「言い換えれば、もしファブラが『x はしかじかの行動を行う』と告げるとすれば、読者はあえて『x がしかじかの行動を行うたびに、通常、y という結果を生じるのだから』と考え進み、『だとすると x の行動は結果 y を生じさせるだろう』と結論付ける」ことであり、緊張、賭け、仮説的推論という特徴を持つ (ウンベルト・エーコ『物語における読者』篠原資明訳、青土社、1993 年、183 頁)。

<sup>6</sup> Adela Yarbro Collins, *The Beginning of the Gospel: Probing of Mark in Context* (Minneapolis: Fortress, 1992) 135.

<sup>7</sup> ひとつの文書内に、満遍なく存在している語を問題としているのではない。例えばマルコ福音書に散見される律法学者 γραμματεὺς という語をもって、二箇所に出現する νεανίσκος の同一性の可能性を否定しようとする反論は不可能である。「律法学者」という語そのものは、マルコ福音書内部には単数と複数両方で多数存在することから「集合」として認識すべきであり、個体間の同一性を問うために使用する意図など存在しないのは明白である。「二つ」の箇所にしか出現しない、それらの箇所の間に関連があると疑われる語を問題とすることに、重大な意味がある。

<sup>8</sup> 山梨 39 頁。

えで、「逃亡する若者」と「空の墓物語」の若者は同一視できない、と安易に「逆算」をするような反論を立てることは許されない。他の福音書と違い、マルコ福音書が「若者」を「天使」だと理解している根拠はない。<sup>9</sup>

この「空の墓物語」の「若者」が「天使」ではないただの「人間」であるとすれば、その本当の身元は「逃亡する若者」と同一人物であるとする選択肢を採ることでのみ判明する。それはイエスの「弟子」うちの一人である。Freddermann は、「逃亡する若者」をその直前の 50 節とのつながりから「弟子」と解するべきであると主張している。<sup>10</sup> また、Stephen B. Hatton は、14:51-52 で若者がイエスに「ついてきて」いたことを表す動詞 συνακολουθέω (従う) に注目し、その若者をイエスの追随者として描くことによって、マルコ福音書が彼を「弟子」として記号論的に指摘している、と主張する。さらに Hatton は、「従うこと following」は「弟子たる資格 discipleship」のイメージを明らかに喚起するという。また彼は、この動詞 συνακολουθέω が、マルコ福音書では他に「一度だけ」5:37 で使われていることも示唆している。<sup>11</sup>

従って、「逃亡する若者」が「弟子」の一人であるということを以って「推考散策」をするならば、「空の墓物語」の「若者」も当然、「弟子」であると考えべきである。さらに、この「若者」が人間だとすると、婦人たちが来るより先に、復活したイエスに出会っていたことになる。この「若者」は「あの方は復活なさって、ここにはおられない」(16:6)と言っているからである。つまり、マルコ福音書においては、「空の墓」の若者は、「最初の顕現の証人」である、ひとりの「弟子」であると結論付けられる。<sup>12</sup>

最終的にはマルコ福音書のテキストは、この「弟子」は「死」をその身にまといながらイエスに従っていたが、イエスの逮捕を契機にそれを放棄し、今度は以前と違う姿でイエスの墓の中で婦人たちに出現しているのだ、というように理解できる。<sup>13</sup>

### III. マタイ、ルカ両福音書の著者によるマルコ福音書の「空の墓」の利用

このマルコ福音書における二人の「若者」の同一視を、マタイ福音書の著者も、ルカ福音書の著者も読み解いていた、と考えられる。この理解に立てば、マタイ、ルカ両福音書の著者が「空の墓物

<sup>9</sup> Allan K. Jenkins, “Young Man or Angel,” *Expository Times* 94(1983): 237-40 は、我々が他の福音書を知らなかったら、この「若者」を「天使」だと考えるかどうかは疑問だと指摘する。

<sup>10</sup> Henry Freddermann, “The Fright of a Naked Young Man (Mark 14:51-52),” *Catholic Biblical Quarterly* 41:33(1979): 415. しかし Freddermann は「空の墓物語」の若者も「弟子」であったという可能性には一切触れていない。

<sup>11</sup> Hatton, Stephen B. “Mark’s Naked Disciple: The Semiotics and Comedy of Following.” *Neotestamentica* 35 (2001): 37-8. この Hatton の指摘によると、この動詞 συνακολουθέω は 5:37 で三人の使徒、つまりペテロ、ヤコブ、ヨハネを指示しているが、その意味するところは重大である。

<sup>12</sup> ここで、マルコ福音書の意図する「最初の顕現の証人」が、ペトロ、ヤコブ、ヨハネのうち一人である可能性が出てくるが、第一コリント 15 章に含まれる最古の伝承において、復活後のイエスの顕現が、弟子の一人である「ケファ」(ペトロ)に対してなされたと伝えられている (15:5) ことにも「符合」する。また、このように「若者」をペトロと同定することで、マルコ福音書でもペトロへの顕現が「あった」と言うことになる。しかし、これについて現時点では深く立ち入らない。

<sup>13</sup> 既に触れた 15:42-47 において、イエスの遺体に亜麻布が巻かれることになるため、イエスがこの「弟子」の代わりとなって「死」んだ、という「文脈比喩」が存在すると理解ができる。

語」のそれぞれのテキストを、どのように描いたのかが説明できる。

ここで注目すべきは、Neil Q. Hamilton の説である。彼は、マルコ福音書における「逃亡する若者」と「空の墓の若者」を同一人物だとして、「逮捕劇と空の墓を結び付ける証人」としての役割を持っていると主張している。その上で Hamilton は、マルコ福音書の「空の墓物語」が、マルコ福音書そのものの中にある「サドカイ派との復活論争」(12:18-27)を前提とするものである、と主張する。<sup>14</sup>

この「サドカイ派との復活論争」の箇所において、イエスが、

**死者の中から復活するときには、めとることも嫁ぐこともなく、天使のようになるのだ。(マルコ 12:25／新共同訳)**

と語っている点こそが重要である。Hamilton は、「空の墓物語」を読むために「復活論争」を前提とするのはマルコ福音書の著者の意図である、と考えている。しかしそれ以上に、この Hamilton の見解は、マルコ福音書を参照して成立したマタイ福音書やルカ福音書の著者らが、マルコ福音書の「空の墓物語」をどのように理解したのか、またその理解の結果なぜ「若者」を「天使」へと変更したのかを想定するために、役立つものである。また同時に、マタイ、ルカ両福音書のどちらもが「逃亡する若者」の記事を欠いている理由を想定するためにこそ、有効であると思われる。

マルコ福音書の「空の墓」の若者が「着て」いた「白い長い衣」という服装が、「イエスの変容」の場面(マルコ 9:2-13)を想起させる。

**六日の後、イエスは、ただペトロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。イエスの姿が彼らの目の前で変わり、服は真っ白に輝き、この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほど白くなった。(マルコ 9:2-3／新共同訳)**

その根拠は、マルコ福音書では形容詞 λευκός(白い)が、この「イエスの変容」の場面と「空の墓物語」の二箇所にはしか出てこないことである。それも前出の「若者」と同じく「空の墓物語」を基点にして二箇所だけ出現する語であるため、双方の場面の間に「統辞関係」を読者が予想する契機として十分機能している。「空の墓物語」の「若者」の服装の色を見た読者に対して、「イエスの変容」を連想した上で「若者」の衣服の「色」の持つ意味を見出すことを、著者は要求している。<sup>15</sup> この場面は、イエスの言葉と三人の弟子の反応によって、「死者の中からの復活」と明確に関係させられている。

**一同が山を下りるとき、イエスは、「人の子が死者の中から復活するまでは、今見たことを誰にも話してはいけない」と弟子たちに命じられた。彼らはこの言葉を心に留めて、死者の中から復活するとはどういうことかと論じ合った。(マルコ 9:9-10／新共同訳)**

<sup>14</sup> Neil Q. Hamilton, "Resurrection Tradition and the Composition of Mark," *Journal of Biblical Literature* 86(1965): 417-18.

<sup>15</sup> Jenkins 238-239 は「若者」の「白い衣」が、天使の衣服ないし死んで天的状態になった人物の衣服を示唆しており、後者に関しては、苦難に忠実に尽くし永遠の命に復活させられるダニエル 12:10 にさかのぼる可能性があるとしている。死者を意図している点は明確だが、ダニエル書への参照は強い可能性はあるものの判然としない。

つまり、マタイ、ルカ両福音書の著者たちは「死者は天使のようになる」と、「白い服装は復活を示している」ことの両方を、前提としてマルコ福音書の「空の墓物語」が読んだと思われる。そして彼らは、自分たちの福音書にその理解を取り入れた上で、<sup>16</sup> さらに分かりやすく洗練された表現となるように、「空の墓物語」の記述の改変を行い、後述する各々の福音書の「特殊記事」の付加を着想したと考えられる。

では、それぞれの福音書について、その改変と付加の理由を具体的に論じていこう。

#### IV. マタイ福音書における「空の墓物語」の編集

マタイ福音書の著者が、その「空の墓物語」(28:1-10)においてイエスの復活の告知者を「天使 ἄγγελος」(28:2)に変え、同時にイエスの死の直後に「聖徒の復活」(27:51-53)の記事を拡大したのは、マタイ福音書の著者が、マルコ福音書における「サドカイ派との復活論争」と「空の墓物語」の「若者」との関連を理解し、その内容に新たに補足しながら平易に書き改めようと考えていたからだと思われる。

マタイ福音書もマルコ福音書と同じように、「サドカイ派との復活論争」(22:23-33)で、「空の墓物語」を読むときに、「前提」しなければならない死者の復活についての「定義」をしているが、マルコ福音書の定義と比べて、大きな改変はされていない。

**復活の時には、めとることも嫁ぐこともなく、天使のようになるのだ。(マタイ 22:30/新共同訳)**

マタイ福音書では、この「定義」を前提として「空の墓物語」を読まなければならない。重要なことはマタイ福音書の著者が、「空の墓物語」において復活を告げる登場人物を、マルコ福音書の「若者」から、「天使」に改変していることなのである。

**さて、安息日が終わって、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリアともう一人のマリアが、墓を見に行った。すると、大きな地震が起こった。主の天使が天から降って近寄り、石をわきへ転がし、その上に座ったのである。その姿は稲妻のように輝き、衣は雪のように白かった。(マタイ 28:1-3/新共同訳)**

それは、マタイ福音書の著者が「聖徒の復活」の記事(27:51-53)を自らの「受難物語」に付加したことが理由であろう。

**しかし、イエスは再び大声で叫び、息を引き取られた。そのとき、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂け、地震が起こり、岩が裂け、墓が開いて、眠りにっていた多くの聖なる者たちの体が生き返った。そしてイエスの復活の後、墓から出てきて、聖なる都に入り、多くの人々に現れた。(マタイ 27:50-53/新共同訳)**

Ulrich Luz はマタイ福音書では、「聖徒の復活」も、「空の墓物語」における「天使」の登場も、と

<sup>16</sup> マタイ福音書は 22:30。ルカ福音書では 20:34-36 で、マルコ福音書の理解に独自の説明を加え拡大されているが、これは後述するとおり「エマオ物語」との関連が存在するからである。

もに「地震」が伴っている(σειώ :shake;27:51/ σεισμός :shaking, earthquake; 28:2)ことから、この二つの記事が互いに関連性を持っており、天使の出現の「地震」で読者は「聖徒の復活」の「地震」を思い起こす、と主張する。<sup>17</sup> また、荒井献はこのマタイ福音書の「聖徒の復活」について、「マタイによると、イエスの死と共に、終末時に待望されている死人の復活が既に実現しつつある」と理解している。<sup>18</sup>

この二つの指摘は重要である。マタイ福音書の「空の墓物語」の編集にかかわるからである。マタイ福音書の著者は、マルコ福音書の「空の墓物語」の「若者」を「死んだ弟子」であり、「その弟子が既に死んでいるならば、白い衣のゆえに復活して現れているのだ」と「推考散策」を行ったのである。さらに、その「推考散策」の結果、マルコ福音書のテキストに内在する疑問、つまり「空の墓物語」の若者がいつ復活したのか、という疑問に答える必要を生じ、「聖徒の復活」を拡大したと思われる。

つまりマタイ福音書の著者から見ると、マルコ福音書を読む限りにおいては、「若者」は空の墓の中で婦人たちに会っているのだから、墓に登場するより前に「復活」していなければならない。つまり、その「若者」の「復活」は空になった墓に入る前に起こっていなければならない。また、この「若者」が証人としてイエスの復活を「見る」ために、イエスより前に既に「復活」していなければならない。さらに、その「若者」がイエスの復活を見たのは、婦人たちのやってくる「日の出」(マルコ 16:2)より前でなければならない。マタイ福音書の著者は、そのようにして若者が「復活」した時を遡及した結果、その適切な「時」は神殿の垂れ幕が裂けたイエスの臨終の瞬間だった、と理解したのである。そして、人々の復活はイエスの死の瞬間に既に始まっているが、彼らが人々の目に触れるのはイエスの復活の後である、と「空の墓物語」より前に順序だてて分かりやすく書いておくことを意図したのである。

マタイ福音書の著者は「聖徒の復活」を新たに付加することによって、「空の墓物語」におけるイエスの復活の告知者にマルコ福音書のようにイエスの「最初の顕現の証人」としての役割を負わせる必要はなくなった、と思われる。しかし、マルコ福音書によって決定された「構造」を大幅に変更することなくイエスの復活の告知者に新たな役目を負わせ、それと同時に「だれが墓の入り口からあの石を転がしてくれるのでしょうか」(マルコ 16:2)という、マルコ福音書に内在しているもうひとつの疑問も解決する必要があるのだろう。マルコ福音書のテキストだけでは、墓の石は「既にわきへ転がしてあった」(マルコ 16:4)としかなく、転がしたのが誰のどんな力によるのかは明確に描かれていない。また、石を動かせないと言っている婦人たちが石を動かしたとは理解できない。また、「若者」は「白い長い衣」は着ているが石を動かしたか定かではなく、むしろ墓が空であることの「証人」となるために石が開いた後に墓に入った人物だ、と解するほうが自然である。そこで、マタイ福音書の著者は、マルコ福音書を「推考散策」した結果、イエスが復活する時に墓の石を明けたのは、イエス自身か、神だ、という二つの選択肢のうちいずれかを選択する必要に至った、と推察する。

そこで、マタイ福音書では読者に無用な混乱を起こさないためにイエスが石を明けるのを描くという選択を避け、神が墓の石を転がしたという選択肢のほうを採用し、あえて「主の κυρίου」を付加した「主の天使 ἄγγελος κυρίου」へと変えたと思われる。それと同時に読者に対し再度の「地震」を確認させることで人々の「復活」がすでに事前に「イエスの臨終」の場面で証明されていることを再確認させ、マタイ福音書の「空の墓物語」は弟子復活の証明のために読むべきではなく、そこに記され

<sup>17</sup> Ulrich Luz, *Matthew 21-28: Hermeneia-A Critical and Historical Commentary on the Bible* (trans. James E. Crouch; Minneapolis: Fortress Press, 2005) 560-561, 565.

<sup>18</sup> 荒井献『イエスとその時代』岩波新書、1974年、191頁。

たイエスの復活の内容にのみ注目するように読者を導こうとした、と推察される。<sup>19</sup>

## V. ルカ福音書における「空の墓物語」の編集

ルカ福音書においては、マルコ福音書の「空の墓物語」を「逃亡する若者」と関連させる解釈をもとに、その「空の墓物語」(24:1-12)においてイエスの復活の告知者を、「二人の人」に変更すると同時に、「エマオ物語」を拡大した。

ルカ福音書の著者も、やはり自分の福音書の「サドカイ派との復活論争」の箇所で、「空の墓物語」を読むときに、「前提」しなければならない死者の復活についての「定義」をしている。これはすでに述べたマルコ福音書における復活の説明を核として、さらに独自の説明を加えるために、次のように拡大したものである。

イエスは言われた。「この世の子らはめとったり嫁いだりするが、次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は、めとることも嫁ぐこともない。この人たちはもはや死ぬことがない。天使に等しい者であり、復活にあずかるものとして、神の子だからである。」(ルカ 20:34-36／新共同訳)

ルカ福音書においては、他の福音書とは別にこちらの「定義」を前提として「空の墓物語」を読まなければならないが、その上で、「空の墓物語」において復活を告げる登場人物が、「若者」から「二人の人 ἄνδρες δύο」(24:1-12)に変更されていることに注目すべきである。

そして、週の初めの日の明け方早く、準備しておいた香料を持って墓に行った。見ると、石が墓のわきに転がしてあり、中に入っても、主イエスの遺体が見当たらなかった。そのため途方に暮れていると、輝く衣を着た二人の人がそばに現れた。(ルカ 24:1-4／新共同訳)

ルカ福音書の著者は、その「空の墓物語」の直後に「エマオ物語」(24:13-35)を続けている。

ちょうどこの日、二人の弟子が、エルサレムから六十スタディオン離れたエマオという村へ向かって歩きながら、この一切の出来事について話し合っていた。(ルカ 23:12-14／新共同訳)

上記の新共同訳では「ふたりの弟子」と訳されているが、それはギリシャ語の原典で δύο ἐξ αὐτῶν(two of them)となっている。つまり、その two of them は、直前の「空の墓物語」における「十一人と他の人(24:9)」ないしは「使徒たち(24:10-11)」に含まれると解するべきである。

ここで注目すべきは、「空の墓物語」と「エマオ物語」の間の、復活の告知者についての表現の違いである。ルカ福音書の著者自身は、「空の墓物語」では、復活の告知者を「二人の人 ἄνδρες δύο」(23:4-5)としている一方、「エマオ物語」においては、復活の告知者が、婦人たちの言葉として間接的に「天使たち ἄγγελοι」であったと伝えられた、とされている。

<sup>19</sup> 従って、墓の石が開いたのは、マルコ福音書ではイエスが墓から出るためであったが、マタイ福音書では婦人たちに墓が空となったことを見せるため、と動機が違ってきている。



「ところが、仲間の婦人たちがわたしたちを驚かせました。婦人たちは朝早く墓へ行きましたが、遺体を見つけずに戻って来ました。そして、天使たちが現れ、『イエスは生きておられる』と告げたと言うのです。」(ルカ 24:23-24／新共同訳)

この細かい「違い」が、意味するところは大きい。著者はあらかじめ「空の墓物語」で「二人の人」と書いているのであるから、二人を「人間」と考えている。しかし、婦人たちの「天使たち」という発言は、著者が場面を説明する「ト書き」ではなく、「人間」である婦人たちの「証言」を伝える、二人の弟子たちの「せりふ」である。つまり、人間である婦人たちの目から見ると、「二人の人」が、「天使に等しい者」に見えたということが、示唆されているのである。

これはルカ福音書の著者が、マルコ福音書の「空の墓物語」を「サドカイ派との復活論争」での復活の定義を前提として理解していた結果である、と想定される。その根拠となるのが、ルカ福音書と同一の著者の手になる使徒言行録の「マケドニア人の幻」の箇所である。

その夜、パウロは幻を見た。その中で一人のマケドニア人が立って、「マケドニア州に渡って来て、わたしたちを助けてください」と言ってパウロに願った。パウロがこの幻を見たとき、わたしたちはすぐにマケドニアへ向けて出発することにした。マケドニア人に福音を告げ知らせるために、神がわたしたちを召されているのだと、確信するに至ったからである。(使 16:9-10／新共同訳)

つまり、ルカ福音書の著者は、何らかのメッセージを伝えられることになる人物の「幻」ὄραμα が、事前にメッセージ伝達の「媒介」である所定の人物に出現し、幻として現れた人物自身にそのメッセージを伝達することを依頼したり命令したりする、と言う発想を持っていたのである。

その理解に基づくと、ルカ福音書の「空の墓物語」と「エマオ物語」も同じ構図で書かれていることが分かるだろう。ルカ福音書の著者は、「媒介」である婦人たちが見たと弟子たちに語った「天使たち」の本当の正体を知っている。それは「エマオ物語」における「二人の弟子」たち自身である。この「二人の弟子」たちは、婦人たちから「天使たち」のことを聞いていたが、「二人の弟子」はそれが自分たち自身の「幻」であったのだ、とは気が付いてはいない。婦人たちも、自分たちが見た「二人の人」の本当の正体を知らないまま、「イエスは復活して墓にはいない」ことを伝えたことになる。

従って、ルカ福音書においては、「サドカイ派との復活論争」における定義に基づいて、「二人の弟子」を「次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々」であると理解できる。このことは、ルカ福音書の著者が、マルコ福音書の「逃亡する若者」と「空の墓物語」の若者との間の関連を理解しており、物語に新しい登場人物である死んで復活した「二人の弟子」を加えながら、それにあわせて改変をしたのであると推察される。

## 日本基督教学会近畿支部会研究発表

研究発表題目	共観福音書における「空 <sup>から</sup> の墓」物語の編集史的研究
所属	広島大学大学院 総合科学研究科 博士課程後期
氏名	溝田悟士

### I. 研究目的

本研究では、「マルコ優先説」を前提として、マルコ福音書の「空の墓」(16:1-8)物語の、マタイ、ルカ両福音書における改変の原因を探るものである。従来までの研究は、この改変の原因を包括的に解明できていない。従って、今回は特に「空の墓」物語の登場人物の相違に重点的に着目することで、この改変の原因についての包括的な説明を、全く新しく提案する。この研究は、キリスト教黎明期における教義の核心部分の発展過程の解明に貢献するものである。

### II. マルコ福音書の「逃亡する若者」と「空の墓の若者」とのテキスト統辞関係

この問題を解くための鍵は、マルコ福音書におけるイエスの復活の告知をする登場人物である若者(16:5)と、特殊記事であるイエス逮捕時に逃亡した若者(14:51-52)が同一人物である可能性である。14:51-52に含まれる「若者」や「亜麻布」、「身にまとう」という語彙によりこの二人の「若者」を同一視させるべき「テキスト統辞」をマルコ福音書が内在しており、「亜麻布」がイエスの遺体に巻かれる(15:42-47)場面で、「死に装束」と読者に発見させる「文脈比喩」の構造を形成している。また「マルコ優先説」が前提のため、他の福音書から「若者」を天使とする類推は困難である。従ってこの若者は、14:50とイエスの復活を知っているとの発言により、弟子の一人であり、福音書執筆当時に既に死んでいた最初の「顕現の証人」とと思われる。

### III. マタイ・ルカ両福音書における「逃亡する若者」の物語の利用

マルコ福音書は12:25で、復活した人間の姿を「死者の中から復活するときは、天使のようになる」という直喩で定義していることから、マタイ、ルカ両福音書の著者らは、このマルコ福音書の「若者」を「死んだ」弟子の一人であると理解した。さらに「白く長い衣」と「イエスの変容」の場面(9:2-13)の関連から、この若者は死後に「復活した弟子」だと理解できる。この理解が、マタイ、ルカの各福音書の記述に影響した可能性は、以下の二つの項目で論じるとおりである。

### IV. 「若者」の再解釈によるマタイ福音書における「空の墓」物語の編集

マタイ福音書の著者は「空の墓」物語(28:1-10)において、上記IIIでの理解に基づいて、イエスの死の直後に「聖徒の復活」の記事(27:51-53)を拡大し、空の墓の「若者」を「天使」に変えた。どちらの場面でも「地震」が発生し関連は明らかである。若者の身元とその復活の時期の不明確さを排除し、イエスの死と死者の復活の同時性の意義を強調するための改変である。

### V. 「若者」の再解釈によるルカ福音書における「空の墓」物語の編集

ルカ福音書の著者は「空の墓」物語(24:1-12)において、上記IIIでの理解に基づいて、空の墓の「若者」を「二人の人」に変更し、「エマオ」物語(24:13-35)を拡大した。その中で、復活の告知者について著者自身は「二人の人」と語っていたにもかかわらず、婦人たちは「天使たち」と語っていることから、「二人の人」は人間の目に「天使のようなもの」に見える存在、つまり「復活した死者」たちである、ということを示す意図がある(cf.使 16:6-10)。「二人」という人数の改変は、「顕現の証人」である「エマオ」物語の二人の「弟子」が対象となっているからである。